

■ハザードマップ改定の概要

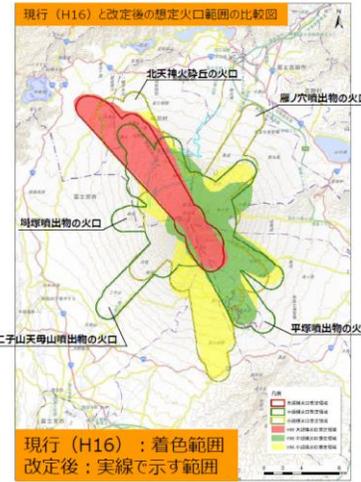
平成16年6月のハザードマップ策定後、富士山に関する各種調査研究により、数々の新たな科学的知見が得られた結果、現在のハザードマップの想定火口範囲や溶岩流等の火山現象の想定影響範囲が拡大する可能性が明らかになった。そのため、富士山火山防災対策協議会は平成30年度より3ヶ年での改定を目指して、「富士山ハザードマップ（改定版）検討委員会」を設置し、専門的・技術的観点から詳細な検討を進めている。

改定作業では、最新の科学的知見に基づき「雁ノ穴火口など新たな噴火口を含む想定火口範囲を設定」「溶岩流、火砕流の噴出規模等の見直し」などが行われ、改定作業2年目の令和元年度末に「小規模噴火の溶岩流」と「火砕流」のシミュレーション結果が公表された。

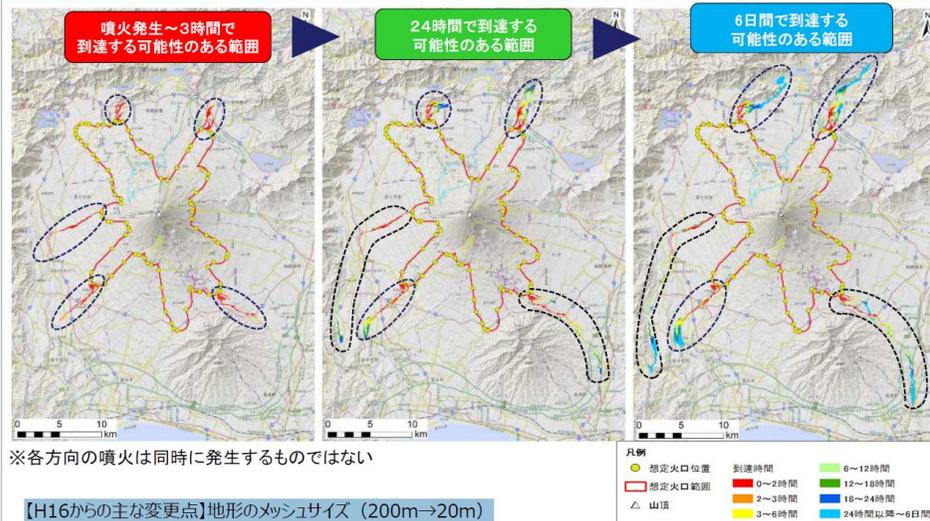
■改定の概要と中間報告の対応点

項目	改定の概要	検討状況
①想定火口範囲	最新の調査結果に基づき変更（拡大）	平成30年度
②対象とする噴火年代	「3,200年前～現在まで」としている過去の噴火について、産業技術総合研究所による富士山地質図（第2版）の新たな年代整理に基づき変更 →活火山の定義である「1万年以内」を踏まえ、特に噴火活動が活発な「5,600年前～現在まで」に拡大	
③地形メッシュサイズ	より詳細な地形データを反映するため、現行の200mメッシュを変更 →20mメッシュを採用	令和元年度
④溶岩流	最新の調査研究において、最大規模となる貞観噴火の噴出量が見直されたことから、溶岩流シミュレーションに用いる条件を見直し →大規模噴火の溶岩の噴出量を7億m ³ から13億m ³ に変更 →毎秒あたりの溶岩の噴出量を大・中・小の噴火シミュレーションごとに再設定した	
⑤火砕流・融雪型火山泥流	○最新の調査研究結果において、最大規模となる鷹丸尾火砕流の噴出規模が明らかになったことから、火砕流シミュレーションに用いる条件を見直し →火砕流噴出規模を240万m ³ から1,000万m ³ に変更 ○火砕流シミュレーションによる想定到達範囲と積雪量観測に基づいて、融雪型火山泥流のシミュレーションに用いる条件を見直し（検討中）	令和2年度
⑥山体崩壊	影響範囲の予測手法や予測結果の記載方法について再検討する	
とりまとめ	ハザードマップ公表に向けた、シミュレーション結果のとりまとめ、表現手法の検討、報告書の作成など	

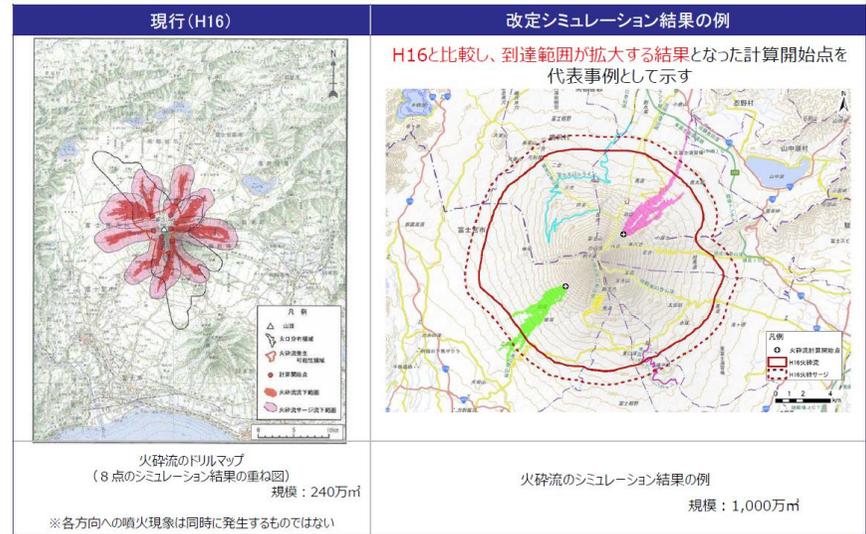
■想定火口範囲の見直し（平成30年度中間報告）



小規模噴火の溶岩流シミュレーション結果（代表点）



火砕流シミュレーション結果（代表点）



・時間の経過とともに溶岩流の影響範囲が拡大
・現行(H16)に比べて、細かな地形が反映され、一部で到達時間が早くなり、到達距離が長くなる傾向となる

【H16からの主な変更点】
・地形のメッシュサイズ（50m→20m）
・噴出量（240万m³ → 1,000万m³）
※最新の調査結果に基づく
※溶岩流と同じ設定

・現行(H16)に比べて、細かな地形の影響が反映され、傾斜の急な北東と南西方向に長く流れ、火砕流の到達距離が長くなる傾向となる